

米国の世代間メンタリング・プログラム

渡 辺 かよ子*¹

1. はじめに

本稿は、「先進」各国における円環的生涯発達支援として目覚ましい成果を上げているメンタリング運動の全貌解明と日本への導入可能性を検討する一端として、米国の世代間メンタリング・プログラム (intergenerational mentoring program) がいかに「潜在能力」¹の拡大による公正の実現を図ろうとしているのか明らかにしたい。

メンタリング (mentoring) とは、成熟した年長者であるメンター (mentor) と、若年のメンティ (mentee, ないしはプロテジェ protégé) とが、基本的に一対一で、継続的定期的な交流し、適切な役割モデルの提示と信頼関係の構築を通じて、メンティの発達支援を目指す関係性を指す。メンタリングは、日常的な自然な状況でなされるインフォーマルなメンタリングと、メンタリング・プログラムを介してなされるフォーマルなメンタリングとに大別される。メンタリング・プログラムは、①参加者募集、②スクリーニング、③マッチング、④ガイダンス、⑤モニタリング、⑥プログラム評価、から構成される。

米国のメンタリング運動は、20世紀初めに創設された BBBSA (Big Brothers Big Sisters of America) を中心に、学校・地域・企業が連携した、ごく普通の市民ボランティアによる青少年発達支援システムとして1980年代以降急速に拡大した。National Mentoring Partnership が2002年に発表した調査結果によれば、米国だけで4000以上のメンタリング・プログラムが存在し、250万人の青少年が一対一のメンタリング・プログラムに参加している。全成人の34%が過去12ヶ月において青少年のメンタリングを行った経験があり、同11%がメンタリング・プログラムに参加している。99%のメンターはメンタリングの経験に満足し他の人にそれを推奨し、5700万人の成人がメンタリングを行うことを真剣に考えている、という²。メンタリング運動は米国のみならず、イギリス等のヨーロッパ諸国、カナダ、オーストラリア等、「先進」各国において急速に拡大している³。

こうした世界的メンタリング運動の中核となっている米国のメンタリング・プログラムの中で異彩を放っているのが、世代間メンタリング・プログラムである。通常のメンタリング・プログラムにおけるメンターの中心的世代は20歳代から50歳代の成人であるが、世代間メンタリング・プログラムにおいては、メンターの年齢が概ね50歳代以上の高齢者世代に限定され、メンティの発達支援に加え、高齢者メンターの社会参加もプログラムの直接的目標とされている点が他のメンタリング・プログラムにはない特徴となっている。後述するように、世代間メンタリング・プログラムは連邦政府の主導による1960年代の各種世代間プログラムの一つとして創設され、はからずも1980年代以降のメンタリング運動に先駆け、その急速な拡大を支えてきた。世代間メンタリング・プログラムが全メンタリング・プログラムに占める割合は不明であるが、1999年の P/PV (Public and Private Venture) の調査によれば、全年齢層からメンターを募集しているメンタリング・プログラムが全体の78%であり、メンターを50歳以上に限定し

*¹言語コミュニケーション学科

ている世代間メンタリング・プログラムは全体の5%を占めている⁴。

近年、日本においてもメンタリングに関する研究がキャリア発達論⁵、教員養成⁶、社会教育における世代間プログラム⁷、青少年の健全育成・生涯発達支援⁸の視点から開始されているが、新しい世代間コミュニケーションの場の創出として着目される世代間メンタリング・プログラムはほとんど知られず、米国のメンタリング運動における世代間メンタリング・プログラムの位置づけや重要性は、未解明となっている。以下、世代間メンタリング・プログラムの有効性に関する理論的根拠とその成立の社会背景を概観した上で、メンタリング運動と各種世代間プログラムの発展との交錯点として世代間メンタリング・プログラムを位置づけ、その代表的事例における成果の分析と日本への示唆を考察してみたい。

2. 米国のメンタリング運動と世代間メンタリング・プログラム

(1) 世代間メンタリング・プログラムと教育思想・教育理論

最近のメンタリング運動を、教育思想史の視点から見ると、それが、古くからの伝統に根付いていることに驚かされる。「賢明な人」「よき助言者」を意味するメンターの語源は、ギリシャ神話に遡る。が、ホメロスの原典では女神アテナがテレマックを支援し、メンター（女神アテナの化身）はほとんど登場しない。メンターという言葉が普通名詞や動詞に転換したのは、フェヌロンの『テレマックの冒険』（1699）で描かれたメンター像のヨーロッパ各国への流布であり、この著は近代教育思想に絶大な影響力を持った『エミール』において、『ロビンソン・クルーソー』に続き、エミールが成人に至る過程において唯一読むことを許される書物である。エミールにとってルソーこそがメンターであったことから、『テレマックの冒険』およびそこでのメンターの発達支援的配慮が『エミール』の教育論の原型の一つであったことは間違いない⁹。

メンタリング概念の重要性は、今日の生涯発達をめぐる多様な理論においても根拠づけられている。例えば、生涯発達理論としては、エリクソンの発達段階論における成年期の generativity（世代継承性、生殖性）の実現と、レヴィンソンやヴェイランドの青年期のメンターの重要性の組み合わせ、支援の共時的・通時的還流ととらえられ¹⁰、またそうした生涯発達が実現される社会条件という点では、コールマンやバットナム等の社会的資本に関する議論¹¹にも繋がっている。教育学や教育心理学における学習論としては、バンデューラによる社会的学習、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」の概念や、レイヴ&ウェンガーの「正統的周辺参加」などの学習理論に基づく発達支援として根拠づけられる¹²。新しい世界への参入とアイデンティティの形成に際して、メンターによる保護、支援、激励が、独力では不可能であろうメンティの新たな可能性を開き、学習を生きられた世界との文脈関連から意味あるものとする。こうした理論的根拠を持つメンタリング・プログラムは、当事者の意図に反してかえってメンティを傷つけるという危険性を伴いながらも¹³、多くの成果を実証している。

上記の理論的根拠はあらゆる種類のメンタリング・プログラムに共通するが、とりわけ世代間メンタリング・プログラムにおいて重要であるのは、エリクソンのいう円熟期の自我の統合に繋がる generativity の実現、両性具有が実現される年齢段階における人間としての生涯発達の実現であろう。青少年と高齢者の共通性、すなわち、①労働力人口でないこと、②明確な社会的役割の欠如、③孤立傾向等、を相互に組み合わせることによって、メンターを必要とするメンティと、メンターであることを必

要とするメンターの自我の統合に繋がる generativity の実現をはかっている点である。

(2) 世代間メンタリング・プログラムの成立と展開

上記のような理論的根拠をもつ世代間メンタリング・プログラムが、なぜ1960年代の米国で成立しえたのか。それは、第一に高齢者人口の増大と豊かな老後という新しいライフスタイルの探求、第二に深刻な社会問題の出現とそれへの闘い、という二つの局面から捉えることができる。

第一は、高齢者人口ならびにその割合の著しい増大である。1900年には310万人（総人口の4.1%）であった65歳以上の人口は、1960年の1660万人（同9.2%）、1970年の2010万人（同9.9%）、1980年の2550万人（同11.3%）に増大し、20世紀の間に65歳以上の人口は、10倍以上増えている¹⁴。1960年代のサン・シティに代表される余暇活動に満たされた活動的後という理想が企業によって宣伝され、実現されていく中で、高齢者医療保険制度（1965）、The Older American 法（同）による高齢者サービスへの補助金制度が開始され、1980年代には社会保障給付の上昇および高齢者住民の資産税減額等の優遇措置も加わった。1986年時点での高齢者人口は12%であるのに、高齢者福祉資金は連邦政府の歳出の27%以上を占め、高齢者が連邦政府から受けとる給付金は、1971年の440億ドルから1984年の2170億ドル、1988年にはほぼ4000億ドルに達している。1959年時点では65歳以上の35%は貧困ライン以下の所得であったが、1968年には25%、1987年には12%と、高齢者の貧困率は着実に低下していった¹⁵。早期退職制度の定着や健康状態の向上によって、フルタイムで働くには年をとりすぎているが、引退するには早すぎる豊かな高齢者世代が出現した。

豊かな老後の実現は、依存・未成熟・教育によって特徴づけられる第一年代、独立・成熟・責任ならびに収入・貯蓄によって特徴づけられる第二年代を終えた高齢者にとって、最終的依存の第四年代の開始に至るまでの個人的満足によって特徴づけられる第三年代（the Third Age）¹⁶の長期化と重要性の増大を意味した。個人的満足と他者に対する市民的責任のバランスをとりながら、どのような社会貢献が可能であるのか、単なる消費ではない生産生活、社会貢献、生きがいの創出による新しいライフスタイルの探求が切実な課題となっていた。こうした高齢期の課題に向けて1960年代から各団体や政府、大学等による多様な試みがなされ、そうした試みの一つが世代間プログラムであった¹⁷。

世代間プログラムとは、「血縁関係にない高齢者と青少年が、世代間の絆形成の奨励、文化交流の促進、青少年世代と高齢者世代の福祉と安全の保持を助ける積極的支援制度を提供する交流を行うよう計画された」もの¹⁸であり、①高齢者が青少年に奉仕するプログラム、②青少年が高齢者に奉仕するプログラム、③高齢者と青少年が共に奉仕を行うプログラム、の三類型がある。世代間メンタリング・プログラムは、世代間プログラムの①に属し、同じく①に属する個人教師（チューター）や養育者、成熟した友人、コーチに比べると、メンターは、必要とされる訓練の度合いと青少年との個人的関与の深さが傑出している¹⁹。

世代間メンタリング・プログラムを成立させた第二の局面は、深刻な社会問題の出現とそれへの闘いである。世代間プログラムは1960年代に開始されていたが、それをさらに発展させたのが、共和党政権下の貧困に端を発する社会問題であった。豊かで教育のある者と貧しく教育のない者との間の経済機会格差が拡大し、男女の報酬格差の縮減と女子の経済的地位の二極化が鮮明化したこの時期、一人親家庭

の全世帯にしめる割合は、1970年の13%から1980年の22%に上昇し、親以外の養育者と暮らす子どもの割合も1980年には一割近くになった。父親（あるいは両親）のいない家庭で育つ子どもの増加と共に子どもの貧困率は上昇に転じ、1986年には21%に達していた²⁰。

白人の郊外流出と黒人の都市集住傾向と共に、都市部の治安は悪化し、子どもの生育環境が問題化していた。特に殺傷現場の目撃による心的傷害を負った子どもは、自他に対する不安や怒り、人間存在そのものの脆弱性を知ることによって、将来の夢に満ちた「子ども時代」を喪失し、30歳になったら何になっているかという質問に「死んでいる」と回答するという²¹。青少年問題および青少年死亡率には、歴然とした人種と地域間の違いが見られた。失業による地域の長老の若者への影響力の低下によって社会道徳の伝授の機会が失われる中で、犯罪や薬物、飲酒等の非行問題、無責任な妊娠、高校中退率の高さ、学校での武器所持等の青少年問題が深刻化していた。

こうした社会状況を自らの手によって打破しようとする闘いが、政治宗教的党派を超えて開始されていた。これが1980年代のメンタリング運動の創始であり、人的ネットワークを通じて地域社会を構築するボランティア運動の画期²²でもある。メンタリング運動は、BBBSAの百年の伝統を基礎に、萌芽期（1980年代）、拡大第1期（1988-1996）、「アメリカの将来のための大統領サミット」（通称メンタリング・サミット）を契機とする拡大第2期（1997年以後）を経て、今日に至っている。1997年のメンタリング・サミットでは、大統領をはじめ各界の有力者が一堂に会し、危機的状況にある子どもに①メンタリング、②放課後プログラム、③乳幼児期の保健、④市場価値のある教育機会、⑤ボランティア活動によるこれらの支援の返還に焦点づけられた運動、を展開することが決議され、2000年までに200万人の青少年の救援が目指された。各州は、資金援助、審議会の設置、メンタリングのための休業時間の保障、広報等の方途によるメンターの確保等、メンタリング・プログラムの充実発展に積極的に指導力を発揮し、支援強化を行っている。2002年1月にはブッシュ大統領が「1月をメンタリング月間（national mentoring month）」とする声明を発表し、メンタリングの記念切手も発行された²³。

こうした近年のメンタリング運動の興隆の中で、世代間メンタリング・プログラムは自身が救貧福祉政策として連邦政府によって導入されたという点で特異であるが、それがさらに1980年代末以降のメンタリング運動と合流することによって、メンタリング運動そのものの幅を広げている。以下、世代間メンタリング・プログラムの代表事例を取り上げ、その実態と成果を分析したい。

3. 世代間メンタリング・プログラムの実態と成果

1) The Foster Grandparent Program (FGP)

FGPは、1965年に経済機会法の下、高齢低所得者を対象とする経済機会局担当の雇用プログラムとして創始された。その後、資金担当部局は、1969年にはThe Older American Actの下で高齢行政部局（The Administration on Aging）に、1971年にはボランティアに関する連邦機関として新設されたACTIONに移され、1973年には国内ボランティアサービス法（The Domestic Volunteer Service Act, DVSA）がACTIONの規定法となった²⁴。

FGPは、Senior Companions, RSVP（The Retired and Senior Volunteer Program）と共に、地域コミュニティの諸問題に対応する高齢市民の経験、技能、才能開発プログラムの連携であるNational Senior

Service Corps (NSSC) の一環として、メンタリングを中心に、学校・病院・治療機関・矯正機関・ヘッドスタート支部・デイケアセンターで活動している。参加資格は一定所得以下の60歳以上の高齢者であり、参加希望者は履歴審査と電話インタビューを受ける。また活動開始前の訓練、活動期間中の訓練も行われる。週20時間の活動が基準となっている。組織構成としては、各地域のNPOと公立機関が、FGPの支援・起動のための補助金を受け取り、虐待や問題を持つ青少年への支援の必要を訴える組織が、地域のFGPと共に、高齢者ボランティアの活動の配置と調整を行う。これらの地域の連携組織は、ボランティア・ステーションと呼ばれ、子ども奉仕局、慈善団体や宗教機関なども含まれる。高齢者ボランティアには、時給2.65ドル（非課税）、交通費、活動時間内の食事、毎年の健康診断、活動時の事故債務保険が給付される²⁵。

2001年の全国概要によれば、連邦プロジェクト補助金が9510万ドル、連邦以外の支援が4000万ドル以上となり、プロジェクト数は339、年間のメンター数は30200人、年間のメンティ数は27万5000人以上、年間の総活動時間は、2730万時間以上となっている。メンターの91%が女性で、人種構成は白人系が55%、アフリカ系が39%、アジア系が2%、アメリカ原住民系が3%、ハワイ・太平洋系が1%、ヒスパニック系は10%である²⁶。

メンターの年齢構成は、60-64歳が14%、65-74歳が49%、75-84歳が32%、85歳以上が5%となっている。メンティの年齢構成は、5歳以下が39%、6-12歳が46%、13-20歳が14%、21歳以上が1%となっている。メンターがかかわった青少年の問題を分野別に件数の多い順に見ると、①学業不振:71500人、②重大な医学的障害:34900人、③発達遅滞・障害:29200人、④虐待・無視:20500人、⑤感情的障害・自閉症:19400人、⑥非行:13800人、⑦言語障害:13200人、となり、ホームレス、身体障害、薬物乱用、妊娠、終末疾病、エイズ、聴覚障害、家出、視覚障害などとなっている²⁷。

FGPの成果については、これまで30以上の研究がなされ、青少年問題への有効性、ならびに高齢者自身の精神健康にもよい影響が及ぼされていることが実証されている²⁸。

2) テンプル大学世代間学習センター(The Center for Intergenerational Learning at Temple University)の Across Ages (AA)

フィラデルフィアに位置するテンプル大学に、1979年に創設された同センターは、生涯を通じ個人や家族の必要に応じるため、世代の連携による地域コミュニティを強化することを使命とし、①青少年と高齢者が地域コミュニティに貢献する機会の創出、②青少年・家族・高齢者に奉仕する組織間の連携促進、③組織がそのプログラムサービスに世代間アプローチをする支援、④世代間戦略の影響力に関する情報を教育者・政策立案者等に提供している。同センターはメンタリングをはじめ、小学校での読み書きの個別指導、放課後プログラム等を提供し、毎年2000人以上が参加している²⁹。

1989年、同センターは世代間メンタリング・プログラムとして Linking Lifetimes と称される新規構想を開始した。その目的は、危機的状況にある青少年や青年犯罪者といったメンティを支援すると同時に、高齢者が社会において生産的であるようにする体系的プログラムを促進することにあった。退学や問題行動という危機的状況にある中学生と犯罪歴のある11歳から21歳までの青少年をメンティとし、これらの青少年を支援するのに必要な時間と努力を快く提供する55歳以上の高齢者をメンターとする世代間メ

ンタリング・プログラムを実施する11の組織が全米から選ばれた。各世代間メンタリング・プログラムは、各種財団からの3万5千ドルから7万ドルの資金援助を受け、年間予算は5万ドルから12万ドルであった³⁰。

Linking Lifetime による世代間メンタリング・プログラムを提供する組織は、以下のガイドラインを充足することが求められた。①協賛機関：青少年または高齢者を代表する、自機関内組織以外の一つ以上の協賛機関（大学、地域産業審議会、ボーイズ・クラブ、FGB等）があること。②メンター募集：各15人から20人の中核的メンターの確保。③メンターのスクリーニングないしは選抜：55歳以上、対象青少年とともに働きたいという願望、組織やメンタリング・プログラムの活動が行われる場所に通うことができること、訓練コースを修了する意思があること、毎週最小2時間、最短1年間にわたり青少年を訪ね、直接面談をするという責務をはたすこと。メンターの志願書、面接、家庭査定、照会調査、犯罪歴調査の結果も検討される。④青少年の推薦委託：機関は推薦された青少年に参加を促すが、参加は自発的なものである。青少年の暴力行為の履歴の有無は通常参照されない。⑤訓練・オリエンテーション：メンターは最小10時間の活動開始前の訓練を受け、活動開始後も青年期の発達、薬物乱用、葛藤解決、コミュニケーション、目標設定に焦点づけられた定期的な計画的訓練を受ける。⑥組み合わせ：高齢者と青少年が積極的で双方に利となる関係性を最大化する組み合わせの探求。メンターの交通手段、相手への希望、技能や長所、健康状態、ならびにメンティの必要性と長所、興味、相手への希望等に基づき、民族文化や言語、メンターとメンティの地理的・社会的距離、人格要因も考慮される。⑦メンターの役割：メンタリングとは、青少年が、有能感や自尊感情の増進と同様、特定の技能を獲得するのを援助するよう計画された、育成的・非専門的役割である。メンターによってなされる具体的な課題は異なるが、接触は、意図的で継続的で直接対面による。メンターはその青少年に提供されるあらゆる支援的サービスの統合的部分であるので、教師やカウンセラー等と緊密に連携することが望まれる。⑧メンターと青少年の活動：メンターは青少年に、感情的支援、地域コミュニティの資源の明示、学習やキャリア発達支援、文化娯楽活動といった広範な援助も提供することが奨励される。メンターは青少年と短期目標を設定すること期待され、イベント開催等も望ましい。⑨スーパービジョンと支援：各世代間メンタリング・プログラムの専従あるいはハーフタイム雇用のプロジェクト・コーディネーターが高齢者メンターの支援にあたる。メンターの定期的会合は、互いの問題を議論し効果的なメンタリング戦略を共有する機会となる。⑩補償：各世代間メンタリング・プログラムの計画に応じて、経費返済、俸給、賃金がメンターに支払われる³¹。

Linking Lifetimes は、メンター、メンティ、双方にとってよい影響があり、世代間メンタリングが現実にも有効であることが報告されている³²。

1991年には同センターは、上記のモデルに基づく新たな世代間メンタリング・プログラムである Across Ages (AA) を開始した。Across Ages の使命は、青少年が十代初期を通して困難な道のりを安全に通過するよう援助するのに成功してきた包括的世代間メンタリング・プログラム構想として、奉仕することにある。当初、薬物乱用防止のための学校を基盤とする世代間メンタリング・プログラムとして計画されたが、そのモデルは拡大され、多様な危機防止要因に対応するものとなった³³。

Across Ages に参加するメンティは、9歳から15歳の生徒であり、通常第6学年を修了して小学校を

卒業する時にこのプログラムが開始される。参加している生徒はアフリカ系、ラテン系、白人系、アジア系アメリカ人であり、多くは貧しく、学業成績や行動に問題をもっている子どもである。多くの生徒は学校を休んだり、弟妹の世話のために休まざるをえない。毎年、子どもたちの三分の一以上は、彼らの実の親が彼らの世話ができないために、祖父母や他の親類に養育されている。子どもたちが住んでいる地域は、貧困、薬物乱用や薬物に関連した犯罪、各ブロックの少なからぬ数の廃屋によって特徴づけられる。子どもたちは、保護者の承認を得ることによってこのプログラムに参加することができ、この8年の間に1600人以上の子どもが参加した。メンターと組み合わせられた子どもは、約半数であるが、すべての子どもは地域奉仕活動や週末の催しに家族といっしょに参加している³⁴。

メンターは60歳から85歳の高齢者であり、総数は常時60人程度である。多くがメンティと同様、フィラデルフィアで生まれ育ち、多くはアフリカ系アメリカ人で、ラテン系や白人系の高齢者も含まれる。毎年約15%のメンターがカレッジ卒業者であり、それ以上の経歴をもつメンターの多くは、教師やソーシャルワーカーであった高齢者である。高校を卒業していないメンターもいるが、すべてのメンターは、よい教育の重要性という信念を共有し、それを奨励している。多くのメンターは祖父母や曾祖父母であったり、教師や保育関係等の専門職であったり、子どもと共にすごした経験をもつ人々である。メンターの退職前の職業は、医療従事者、トラック運転手、小売販売員、刑務所職員、コック、裁縫士、裁判所職員など、多彩である。三分の一のメンターはパートタイムで働き、少なくとも半分は他のボランティア活動も行っている。少なくとも三分の二のメンターは、配偶者を亡くすか、離婚している。少なくとも四分の三のメンターは、5年間このプログラムに留まり、離脱は自分や家族の病気によるものである。メンターの収入はさほど高くなく、家計収入が4万ドルを超えるメンターは少ない³⁵。

Across Ages においても、①生徒の学校、将来、年長者への態度、②高齢者への態度、③高齢者に関する知識、④薬物使用に関わる状況への反応、⑤30日間の薬物（不）使用、⑥地域コミュニティ・サービス、において、プログラム参加生徒とそれ以外の生徒との間に有意な差が見られる。また、高齢者メンターとメンティの双方から他方への感謝、プログラムに参加してよかったという声が多数寄せられている³⁶。

3) プリンストン・プロジェクト55 (Princeton Project 55, PP55)

プリンストン・プロジェクト55は、プリンストン大学の1955年度に入学した同窓生によって設立されたNPOである。その発端は1989年の同窓会における、卒業30周年を記念する事業として、市民運動の指導者として著名なラルフ・ネーダー（Ralph Nader, 1934 -）の提案にあった。大学卒業後、十分に富をなし、後継者育成も終え、出世競争も首尾よく終えた成功者である同窓生の残りの人生は、ゴルフ場で過ごすだけに費やされてはならず、社会から受けた恩恵を社会に返す具体化として、母校のより多くの後輩学生が公共関連のキャリアを歩むよう導くことを目指す中心機関を設立しようというものであった。その2ヵ月後に250人の同窓生は、大学とは独立のNPOであるCenter for Civic Leadershipを設立し、奨学生や研修生を募集してその支援にあたるPublic Interest Programを開始した。

このプログラムには200人以上のプリンストン大学の学生が応募し、研修受け入れ機関による書類審査ならびに電話によるインタビューを経て、研修生ないしは奨学生に採用されている。毎年15都市以上

の約100の機関がこのプログラムの学生を受け入れ、これまで900人以上の学生が参加している。このプログラムは、研修生や奨学生それぞれに、先輩卒業生のメンターがついて、実習先を訪問したり、定期的に連絡をとったりして、個別支援を継続的に提供している。高齢者卒業生が直接後輩のキャリア支援にあたるこのプログラムは、メンターとメンティ双方への満足に加え、参加機関数の増加に示されているように、大学での学業と社会での実践を高齢者の知見と支援によって強化する新しい学生の研修制度として高く評価されている³⁷。

4. おわりに

以上、世代間メンタリング・プログラムの代表事例として、FGPとAA、PP55を取り上げて、実態を分析してきた。ここで明らかになったのは、世代間メンタリング・プログラムにおけるごく普通の市民である高齢者メンターの活躍である。

世代間メンタリング・プログラムの原点となったFGPは1960年代の経済機会法による高齢者のための救貧雇用法であったが、そのFGPが年間10万人以上の子どもにメンタリングを行っている。FGPは所得制限があるために、すべての高齢者に参加資格があるわけではないが、僅かな俸給（日給9ドル）が裕福ではない高齢者の生活を潤し、またそれ以上にメンタリングが高齢者に大きな生きがいを提供している。ここには、FGPが所得制限を課した雇用法であるという点で、メンタリング運動そのものの主流にはなりえない限界と、政府の取りうる福祉政策の有効性が同時に示されている。

また、Across Agesが示す大学プログラムの地域への貢献は、とりわけその効果測定の実証とメンタリング以外の多種のプログラムを大学という知的人的資源を最大限活用できるという点で、今後も世代間メンタリング・プログラムの中心としての大学の重要性、市民運動拡大のための確かな知見に基づく有効な実践の探求拠点の意義を示している。さらに、PP55は、高齢者が後輩世代の直接的支援にあたる同窓会活動の新たな展開可能性を示している。

米国以上に急速な高齢化が進展し、また青少年問題そのものや雇用や教育、問題行動等多くの課題を抱えている日本において、米国の世代間メンタリング・プログラムの成果とそれをもたらした政府と大学の役割は、メンタリング運動の活性化のための多くの学ぶべき示唆を提示しているように思われる。メンタリングは、個別指導やコーチに比べると比較的長期間の高度な訓練と個人的関与が要求されるものであり、それゆえ高齢者メンターの豊かな経験に基づく知的実践的学習を活性化しているが、個人の適性の面からもすべての高齢者が参加できるものでもない。重要なことは、メンタリングとそれ以外の活動の同時並行的展開、雇用政策の一環としての俸給の支給とそれによる安定したメンターの確保等、市民団体のみでは実現が困難な枠組み支援を政策戦略として考えることではないだろうか。そしてこうした政府からの枠組み支援と地域住民の生涯発達支援の拠点としての大学の実践的研究に基づく世代間メンタリング・プログラムは、当事者である高齢者さえも予期しなかった「潜在能力」の拡大、こうしたプログラムによる関係性や人的ネットワークの創出なしには浪費され埋もれ朽ちて行ったであろう「潜在能力」の開発を促している。単なる富の分配における平等ではない「潜在能力」の開発という点からの公正の実現に向けた一つの端緒がここに示されているように思われる。

- 1 Sen, A., *Inequality Reexamined*, Oxford University Press, 1992. (池本幸生他訳『不平等の再検討：潜在能力と自由』岩波書店1999年)
- 2 National Mentoring Partnership, *Mentoring in America 2002*. (<http://www.mentoring.org./common/one-report>)
- 3 Miller, A., *Mentoring Students & Young People*, Kogan Page, 2002. Cutterbuck, D. & Ragins, B. R., *Mentoring and Diversity: An International Perspective*, Butter-Worth-Heinemann, 2002.
- 4 Sipe, C. L. & Roder, A. E., *Mentoring School-age Children: A Classification of Programs*, Public/Private Ventures, Winter 1999, Prepared for the Public Policy Council of The National Mentoring Partnership, p. 17.
- 5 久村恵子「メンタリング」宗方比佐子・渡辺直登編『キャリア発達の心理学：仕事・組織・生涯発達』川島書店2002年。等。
- 6 木原成一郎「イギリスの『学校を基礎とした教員養成』(a school-based initial teacher training)におけるメンターとしての学校教師の役割：小学校の体育授業を中心に」『広島大学学校教育学部紀要』I部22, 2000年。等。
- 7 中川恵理子「米国における世代間プログラムの成立と展開」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第41巻, 2001年。等。
- 8 渡辺かよ子「円環的生涯発達支援としてのメンタリング・プログラムに関する考察」『教育学研究』69-2, 2002年。等。
- 9 ルソー『エミール (下)』岩波文庫1982年10, 128. 244頁。フェヌロン『テレマックの冒険 (上・下)』(朝倉剛訳) 現代思潮社1969年。 Fenelon, F., *Telemachus, Son of Ulysses*, edited & translated by Riley, R., Cambridge University Press, 1994.
- 10 Erikson, E.H. *Childhood and Society*, Norton, 1963. Erikson, E.H. ed., *Adulthood*, Norton, 1978. Levinson, D.J. etc., *The Seasons of a Man's Life*, Ballentine, 1978. (南博訳『ライフサイクルの心理学 (上・下)』講談社1992年。 Vaillant, G., *Adaptation to Life*, Harvard University Press, 2001(1977).
- 11 Coleman, J., *Families and Schools, Educational Researcher*, Aug.-Sep. 1987. Putnam, R., *Bowing Alone*, Simon & Schuster, 2000.
- 12 Bandura, A., *Social Learning Theory*, Prentice-Hall, 1977. 中村和夫『ヴィゴツキーの発達論』東京大学出版会1998年。Lave, J. & Wenger E., *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press, 1991. (佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書1993年)
- 13 Rhodes, J., *Stand by Me: The Risks and Rewards of Mentoring Today's Youth*, Harvard Univ. Press, 2002.
- 14 U.S. Census Bureau, U.S. Demartment of Commerce, *Demographic Trends in the 20th Century*, 2002, p.59.
- 15 Phillips, K., *The Politics of Rich and Poor*, Random House, 1990.
- 16 Laslett, P., *A Fresh Map of Life: The Emergence of the Third Age*, Harvard University Press, 1991(1989).
- 17 Freedman, M., *Prime Time*, Public Affairs, 1999.

- 18 Newman, S., History and Evolution of Intergenerational Programs, Newman, S. et al. ed., *Intergenerational Programs*, Taylor & Francis, 1997.
- 19 McCrea, J. M. & Smith, T. B., Types and Models of Intergenerational Programs, in Ibid.
- 20 Phillips, op.cit.
- 21 Goleman, D., Attending to the Children of All the World's War Zones, *The New York Times*, Dec. 6, 1992.
- 22 ケン・アレン『ボランティアが変える世界』（榎田勝利監訳）アルク1998年18-19頁。
- 23 渡辺かよ子「米国におけるメンタリング運動の展開」『言語文化』（愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会紀要）第11号，2003年。
- 24 (<http://www.seniorcorp.org/research/history.html>) *Faster Grandparents Accomplish Report*, Oct. 1999-Sep. 2000, Apr. 2001.
- 25 (<http://www.seniorcorp.org/joining/fgp/index.html>)
- 26 (<http://www.seniorcorp.org/research/overview-fgp01..html>)
- 27 Ibid.
- 28 Freedman, op.cit., pp.109-122.
- 29 (<http://www.temple.edu/cil/Acrossageshome.htm>)
- 30 Styles, M. B. & Morrow, K. V., *Understanding How Youth and Elders Form Relationships: A Study of Four Linking Lifetimes Programs*, P/PV, 1992, A-1.
- 31 Ibid, A1-A3.
- 32 Ibid.
- 33 Taylor, A. S. & Bressler, J., *Mentoring Across Generations*, Kluwer Academic/ Plenum Publishers, 2000.
- 34 Ibid., pp. 5-6.
- 35 Ibid., pp.6-7.
- 36 Ibid., pp.10-16.
- 37 (<http://www.project55.org/>)